

里見宗次 二つの「JAPAN」

京都工芸繊維大学美術工芸資料館では、3月6日から4月22日まで「里見宗次—フランス・日本・タイのグラフィックス」という展覧会を開催する。里見宗次(1904-1996)は、1922年美術を学ぶため単身パリに渡りその後デザイナーに転身、アール・デコのデザイナーとして国際的な地位を確立した。第二次世界大戦が激しさを増した1940年に里見は日本に帰国するが、翌年には日本政府によりフランス領インドシナとタイに派遣される。タイで12年あまりを過ごした後、再びパリに戻りデザイナーとしてその生涯を送った。彼の洗練されたエスプリに富むデザインは戦前期のポスターを通じて比較的良好に知られている。しかし一方で、彼がフランス・日本・タイで辿った軌跡が語られる機会はこれまであまり多くはなかった。京都工芸繊維大学美術工芸資料館は、作家とご遺族のご厚意により寄贈された多くの作品および関連資料を所蔵している。そこでこの展覧会では、ポスターから新聞広告やパッケージにいたるグラフィック作品、彼

が自身のポスターを再制作した作品群、スケッチや記録写真などの所蔵資料を紐解くことで、里見の知られざるグラフィックストともにフランス・日本・タイにおける彼の軌跡を辿りたいと思う。

この稿では展覧会の案内を兼ねて、里見宗次のグラフィック作品のなかでもっとも著名なものの一つであるポスター《Japan》(1937年)【図1】とそれにまつわる所蔵資料を紹介する。このポスターは、里見が1936年に14年ぶりに日本に一時帰国した際に日本の鉄道省国際観光局から依頼を受けて制作されたもので、「車窓風景」というタイトルが付けられ1万枚が刷られたという。国際観光局は1930年に日本政府が外客誘致のために鉄道省の外局として設置した機関で、観光を通じた外貨獲得と国際親善を目的に、旅行案内書やパンフレットなどの印刷物、英文叢書や映画などさまざまなメディアを使って日本の観光イメージの浸透を図った。その宣伝の対象はアメリカを主とした西欧圏を中心に、各国の旅行者やホテル、鉄道会社といった旅行関係から図書館などの教育機関、商業会議所にいたるまで多岐に及んだという。印刷物のうちポスターは鳥瞰図絵師・吉田初三郎、日本画家・伊藤深水、写真家・小石清、イギリスのデザイナー・P・I・ブラウンらの原画で木版や最新の印刷技術によるものが毎年数種制作された。ほとんどのポスターには「JAPAN」の文字が大きく印字され、その主題は特定の観光名所に限定されないものもあり、国際観光局はこれらのポスターを通じて「美しい日本」というイメージを浸透させることに主眼を置いたと考えられている。

里見はこれら一連のポスターのうち、国際観光局の呼びかけによる第二回東洋観光会議のためのポスター《東洋への誘い》(1936年)の制作に続いてこの《Japan》を手がけた。当時のタイトルが「車窓風景」とあるように、このポスターは猛烈なスピードで駆け抜ける鉄道列車の最後尾の車窓から、過ぎ去る日本の風景を捉えたものである。そこには、極端な遠近法で表された一本の線路のみで鉄道の存在を表すというカッサンドルの強い影響が感じられる着想、きっぱりとした対角線構図、スピード感を表すためのエアブラシや刷毛によるグラデーション、限られた色数による明快な配色と単純化された形態、ガラス窓を暗示するサンセリフの活字といったように、隅々まで表現の工夫がされている。里見は敗戦後のタイでの抑留生活で自身の作品が憲兵によって焼却されたため、切り絵のコラージュによる再制作を試みており、美術工芸資料館ではこれら再制作作品も所蔵している。このポスターも再制作されたのだが【図2】、そこには構図への気配りやグラデーションの筆使い、コラージュによるモチーフの強調、文字のレタリングやその構成の腐心がみられ、彼のデザイン制作の息遣いを感じることができる。このよう

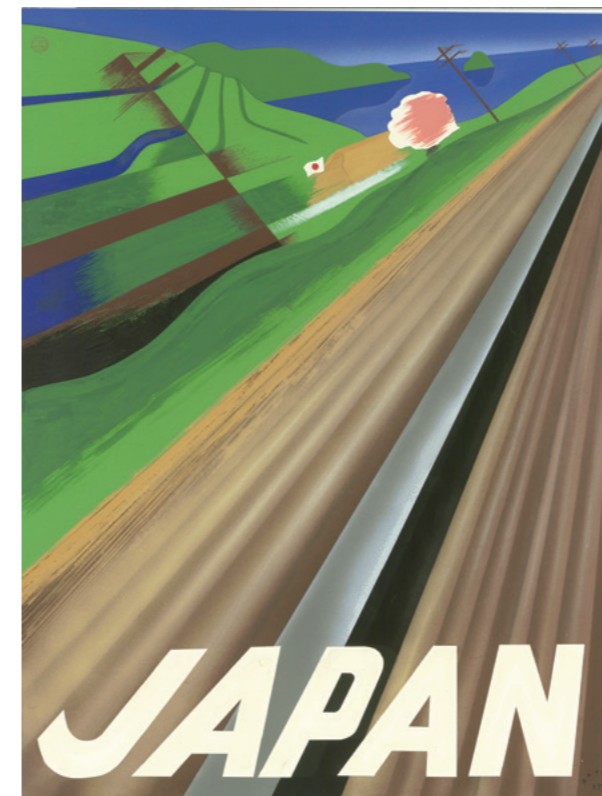


図2 里見宗次
《Japan》(作家による再制作) 再制作年不詳 AN.4725-19

な創意工夫の結晶であるこのポスターからは、都市、機械、スピードなどをキーワードとするアール・デコのエッセンス、あるいは大衆に向けてメッセージを瞬時に訴えることを信条とする近代特有の広告表現が見いだせよう。しかし一方で車窓に広がるその風景をみれば、モチーフと表現におけるモダンな要素とは対照的に、遠景には小さな島々が点在するおだやかな海、中景には緑色づく棚田、その中央には桜の木と稲干し、そして日本国旗が印象的に配されている。里見が一時帰国した際に見た瀬戸内海の印象からこの風景描写が着想されたともいわれるが、その抽象化されたのどかな風景は14年ものあいだ異国の地で生きた彼の目に映った日本の素朴な原風景であったようにも思われる。このポスターではこの素朴な原風景がモダンのなかに見事に溶け合っているのだが、これは依頼主である国際観光局が求めた「美しい日本」のイメージでもあったと思われる。というのも、1937年7月の日中戦争開戦が迫り日本を取り巻く戦況が厳しさを増していたなかで、観光を通じた国際親善を目的の一つとした国際観光局は、西欧列強に並ぶ文明国である一方で平和的で素朴な国でもあるという二重の日本イメージを発信しようとしたと考えられるからである。里見は西欧のデザイン言語

を駆使することができる日本人であり、かつ西欧のフィルターから見た日本をイメージ化することができる稀有な存在であったがゆえ、依頼主にとってうってつけのデザイナーであったのだろう。

こうして里見は日本を代表するデザイナーとして国際的な活躍が続くことになる。たとえばパリ万国博覧会広告館(1937年開催)で彼は審査員を務め、さらに新作であるこのポスターを出品しグランプリを受賞した。その国際的な活躍ぶりは、彼が描いたスケッチからもうかがい知ることができる【図3】。パリの広告業界で旧知の仲であったカッサンドルやジャン・カルリュ、またヘルベルト・バイヤーなど錚々たるデザイナーたちが立ち並びその左の片隅に、煙草をくわえた小さな彼の姿が戯画風に描かれており、彼の控えめな人柄をうかがうことができる。当時の日本においてもその活躍ぶりはインパクトをもって受け止められ、杉浦非水や原弘、山名文夫ら戦前・戦後の日本のデザインをけん引した面々と交流をもった。このポスターは、こうしたフランスと日本をまたぐ彼の活躍を象徴する一枚でもある。

(美術工芸資料館 技術補佐員 前川 志織)



図3 里見宗次
《パリ万国博覧会館に集まったグラフィック・デザイナーたち》『里見宗次スクラップブック』より、1937年 ANなし

参考文献:

国際観光局編『観光事業十年の回顧』国際観光局、1940年
天野知香「『他者』をめぐる交錯するまなざし—里見宗次と『オリエント・コールズ』」、『美術フォーラム21』、2011年
東京国立近代美術館編『ようこそ日本へ：1920-30年代のツーリズムとデザイン』東京国立近代美術館、2016年



図1 里見宗次
《Japan》1937年 AN.4846-2